# 杏林大学のシーズを地域の街づくりへ展開する総合的研究

杏林大学地域総合研究所　長島文夫、前野聡子

【概要】
杏林CCRC研究所は、2021年に杏林大学地域総合研究所と名称を変更し、研究テーマとして生きがい創出、健康寿命延伸、災害に備えるまちづくりのほかに、ウェルネスツーリズムを加えている。2021年度、長島担当のプロジェクトとして、ロボット介護機器導入マニュアル案の活用、がん教育、患者見守りのためのアプリケーション開発を行った。また、「調布スマートシティ協議会」が、調布市、電通大、調布アフラック、NPO調布市地域情報化コンソーシアムにより設立され、持続発展可能な街づくりが始まっていることを受け、医療系学部を持つ杏林大学として、ヘルスケアサービスといった視点で情報を共有した。今後は、アカデミアのシーズを地域に展開させるプロジェクトを工夫して地域の街づくりに協力していく予定である。

## （１）ロボット介護機器導入マニュアルの活用

「ロボット介護機器の科学的効果検証研究」（AMED ロボット介護機器開発・標準化事業）において、三鷹世田谷地区で得た「ロボット介護機器の効果的活用」のデータを反映した移動支援・排泄支援・入浴支援のマニュアル（案）としてまとめた。現在、経産省/AMEDが主催する「介護ロボットポータルサイト」や研究代表者施設の大内病院のサイトにてダウンロード可能になっている。

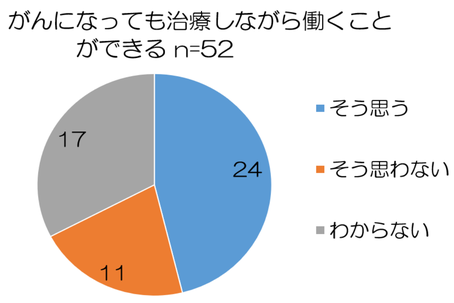
三鷹世田谷地区等の実際の訪問診療医や介護関係者に本ロボット介護機器支援マニュアルを紹介した。ロボット介護機器を検討・導入の際に参照いただき、また有効な活用法については、今後、保健学部等の専門家の意見も組み入れて工夫を行う。

ロボット介護機器支援マニュアル

## （2）がん教育を通じて、地域社会へ健康教育を展開

小中高校で、健康教育の一環として「がん教育」が行われている。我々がん医療に従事する教育者も東京都から依頼を受けて、対応してきた。2022年度は小金井市の高校から依頼を受け、出張授業として教育支援を行った。事前アンケートにより、がんについての基本的な知識を確認することで、例えば、理解度の低い就労に関する項目など、重点をおいて内容に反映した。また、養護教諭と相談して家族や知人の健康状態にも配慮した。授業後の生徒からのアンケートにおいては、がんの予防と治療の意義への理解が深められたといった感想が寄せられた。

第10回 杏林CCRCフォーラム（2022年3月12日）では、「がん教育のこれから」を取り上げ、長島、中島恵美子保健学部教授、橋詰崇課次長から講演を行い、これまでの取組みについて紹介した。今後は、がん教育アプリ開発を工夫し、事前学習に用いるなど、効果的な協力を行うことを予定している。



がん教育事前アンケートより

第10回杏林CCRCフォーラム

## （３）患者見守りのためのアプリケーション開発

新型コロナ感染症の影響もあり、遠隔診療や訪問診療のニーズが増している。AP TECH（株）が行っている岩手県八幡平市メディテックバレー推進事業において、遠隔診療・遠隔見守りに関する事業に対し情報共有を行った。岩手県では常勤医不在の診療所をスマート診療所として、ICTを活用した見守りについて実証実験を行っている。都市部と地方での違いに配慮して開発を継続する予定である。

## （4）調布スマートシティ構想との連携

地域の街づくりといった視点で調布スマートシティ協議会と地域交流課で情報交換を行った。これまでに杏林地域研究所が展開してきたヘルスケアサービス、都市災害等の視点を組み入れた街づくりに協力できると考えている。地域の街づくりを目指して、アカデミアのネットワークを強化し、産官学民連携を継続する。